

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

木々もすっかり芽吹き、新緑の葉が茂る季節となりました。先月のパラリンピックに心打たれ

た方は多かったと思います。一方で世界情勢、戦争に目を背けたい現実があります。人はどうして争うのか、殺しあうのか理解しがたいことです。4月は新しい門出の季節です。未来の世代にどうか平和な世界が訪れるように願うばかりです。花冷えの季節柄、お体をくれぐれもご自愛ください。

サンライズの物語

年を重ねることは辛いだけではない

生き方について考える物語



その方は90歳まで娘家族の為に台所に立ち調理をされていた方でした。

両下肢筋力が低下しないようにリハビリにも通い自身の体を維持していたのですが、ある日外出時に転倒し怪我をしてから痛みが続きすっかり自信を失ってしまったのです。

以前のように自分でできる事ができなくなったことで、精神的にも落ち込んでおり生きる気力を無くしてしまったのです。

若い時は体に心を合わせて動いているのですが年を重ねるとできない事が増え、体に心を合わせ自分の心の折り合いをどうつけたら良いのかわからなくなるとの事。

その方の話を聞いていて、ドイツ出身の神経学者ルートヴィヒ・ゴッドマン「パラリンピックの父」と呼ばれた方の言葉を思い出しました。「失われたものを数えるな。残っているものを最大限に生かせ」と・・・

年を重ねる事は辛いことです。ただ、できることも沢山残っています。

そして、自分が失ってみてわかることがあります。人を想いやる優しい気持ち・・・それは自分の心だと・・・誰にも阻害されはしません。

いくつになっても心だけは豊に感性を磨き続ける生き方ができればと想います。

サンライズのデイサービス陽光だより



お散歩で公園に。「梅の花なんて久しぶりに見たわ」「天気良くて気持ちいい」と喜んでいました。



ひな人形と写真を撮ったり、バースデーカードとケーキでお誕生日の方のお祝いをしました！



NEWS 今月のニュース

「おばあちゃんもこうやったわ」認知症の概念変わる、患者視点で紹介した書籍反響

認知症の人の頭の中にはどんな世界が広がっているのか。患者本人の視点から症状を紹介した本「認知症世界の歩き方」が「読者が選ぶビジネス書グランプリ」リベラルアーツ部門に輝いた。手掛けたのは兵庫県明石市の出版社「ライツ社」。全国の書店でフェアが組まれる栄冠に「認知症を身近な問題と感じていない人にも手に取ってもらえる」と喜ぶ。（松本寿美子）

旅行記スタイルで、記憶を失い行き先が分からなくなる「ミステリーバス」、人の顔が分からなくなる「顔無し族の村」、時間感覚が狂ってしまう「トキシラス宮殿」などの章がある。ユニークなネーミングが読み手の興味をそそり、認知症による行動の理由を解き明かしていく。

著者の筧（かへい）裕介さんは、デザインの力で社会の課題を解決する「ソーシャルデザイン」の第一人

者。医療者や介護者の立場から書かれた本は多いが、本著は認知症者100人へのインタビューを基に編まれた。ライツ社社長の大塚啓志郎さん（36）が、筧さんのフェイスブックに目を留め、出版につながった。

特に大塚さんの印象に残ったのは、入る度に温度や泉質が変わる「七変化温泉」。認知症者が「お風呂を嫌がる」原因の一つが身体感覚のトラブルという。いつも通りのお湯なのに、極度に熱く感じたり、ぬるっとした不快さを感じたり。「お風呂が嫌なんじゃない、そこに明確な障害があるんだと。それが分かるだけでも認知症の概念が全く変わった」。

昨年9月の発行から反響は大きく、13万部を突破した。本を読んだ介護経験者から「知っていれば気持ちを分かってあげられた」などと感想が届く。

2025年には、4人に1人が75歳以上になるとされる。大塚さん

も亡くなった父方の祖母が認知症だった。介護した母親に本を渡すと「おばあちゃんもこうやったわ、と笑いながら思い出話を始めた。母が当時のことを話せた分だけ心が軽くなっていけば」と話す。

「認知症は誰にとっても地続きの世界。本が家族で話題にできるきっかけになれば」と大塚さん。「認知症世界の歩き方」は2090円（税込み）。



「ちょっとユーモアがあるから渡しやすい。自分も少し覚悟ができたかな」と語る大塚啓志郎さん＝明石市桜町2

<神戸新聞NEXT2022/3/28(月)>

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。 <http://www.samaba.jp/back-number/>